

H A K A T A

博多 185

— 博多遺跡群第234次調査報告 —

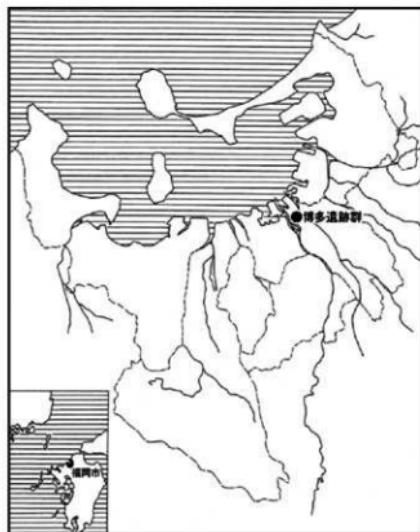
2022

福岡市教育委員会

HAKATA

博多 185

— 博多遺跡群第 234 次調査報告 —



遺跡略号 HKT-234
調査番号 1937

2022

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書はホテル建設に伴い、博多区店屋町地内で実施した博多遺跡群第 234 次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、中世から近世の井戸、土坑、柱穴などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社プレサンスコーポレーション様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月 24 日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　　言

1. 本書はホテル建設に伴い、福岡市博多区店屋町地内において実施した博多遺跡群第 234 次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット S P 井戸 SE 土坑 SK その他 SX
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 1937	遺跡略号 HKT-234	分布地図番号 049 天神
所在地 博多区店屋町 202-1, 202-2, 203, 204-1		調査面積 130.5 m ²
調査期間 20190819～20191011		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	2
1 調査の概要	2
2 遺構と遺物	4
第1面	4
第2面	11
第3面	14
第4面	14
3 まとめ	16
図版 1～7	19～25

挿図目次

図 1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図 2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)	3
図 3 調査区位置図 (S = 1 / 300)	3
図 4 第1面平面図 (S = 1 / 100)	5
図 5 S E 0 1 実測図 (S = 1 / 40)	5
図 6 S E 0 1 出土遺物実測図 1 (S = 1 / 3)	6
図 7 S E 0 1 出土遺物実測図 2 (S = 1 / 3)	6
図 8 S E 0 1 出土遺物実測図 3 (S = 1 / 3、1 / 2、1 / 1)	9
図 9 第1面遺構実測図 (S = 1 / 40)	10
図 10 第1面遺構出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2、1 / 1)	11
図 11 S K 0 9 出土遺物実測図 (S = 1 / 4、1 / 2)	12
図 12 第2面平面図 (S = 1 / 100)	13
図 13 S K 18、S P 出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)	13
図 14 第3面平面図 (S = 1 / 100)	14
図 15 S K 20 および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3、1 / 2)	15
図 16 第3面 S P 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	15
図 17 第4面平面図 および S P 出土遺物実測図 (S = 1 / 100、1 / 3)	16
図 18 包含層出土遺物実測図 1 (S = 1 / 3、1 / 2、1 / 1)	17
図 19 包含層出土遺物実測図 2 (S = 1 / 2、1 / 1)	20

図版目次

図版 1 第1面全景 (西から) S E 0 1 (南東から) S K 0 2・0 9 (南東から) S K 0 4 (北東から) S K 0 7 (北東から)	
図版 2 第2面全景 (西から) S E 0 1 (南東から) S K 18 (南東から)	
図版 3 第3面全景 (西から) S K 20 (北西から)	
図版 4 第4面全景 (西から) 調査区南壁 (北西から) 図版 5 調査区東壁 (南西から)	
図版 6 出土遺物 1 図版 7 出土遺物 2	

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成 31（2019）年 3月 11 日付で、株式会社プレサンスコーポレーションより福岡市博多区店屋町 202-1、202-2、203、204-1 地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号 30-2-1199）。同地内は博多遺跡群の範囲内であり、平成 11（1999）年 9月 30 日に確認調査を実施し、現地表面下 150cm で遺構を確認している。

今回はホテル建設が計画されており、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和元（2019）年 8月 19 日にバックホウによる表土鏟取りから着手した。令和元（2019）年 9月 2 日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、同年 10 月 11 日に終了した。なお調査範囲は建築工事予定範囲のうち、攪乱が及んでいない範囲とし、それ以外については埋蔵文化財が現状保存されている。

2 調査体制

調査委託 株式会社プレサンスコーポレーション

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 令和元年度 資料整理 令和 2・3 年度）

調査総括 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 普波 正人（令和元～3 年度）

同課調査第 1 係長 吉武 学（令和元・2 年度）

本田 浩二郎（令和 3 年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 松原 加奈枝（令和元・2 年度）

井手 瑞江（令和 3 年度）

内藤 愛（令和 3 年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 本田 浩二郎（令和元・2 年度）

田上 勇一郎（令和 3 年度）

同課事前審査係主任文化財主事 田上 勇一郎（令和元・2 年度）

森本 幹彦（令和 3 年度）

同課事前審査係 朝岡 俊也（令和元年度）

山本 晃平（令和 2・3 年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第 1 係 木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた 3 列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。3 列の砂丘の内、現在の呉服町交差点付近を境に博多湾寄りを息浜（おきのはま）、内陸の 2 列を博多浜と呼称している。現状は JR 博多駅から真っすぐ海側に向かって伸びる大博通りを中心とし、高層のマンション・ビルが立ち並ぶ中、古くからの町割りが残る区域となっている。

今回の調査地点は、遺跡の中央部、呉服町交差点から南西へ約 180m の店屋町地区に位置する。息

浜と博多浜の砂丘に挟まれた谷地形の中に当たる。息浜と博多浜は、平安時代末期、現在の呉服町交差点の位置で陸橋によりつながり、その東西に広がる谷部は中世期に徐々に埋め立てられていったことが判明している。

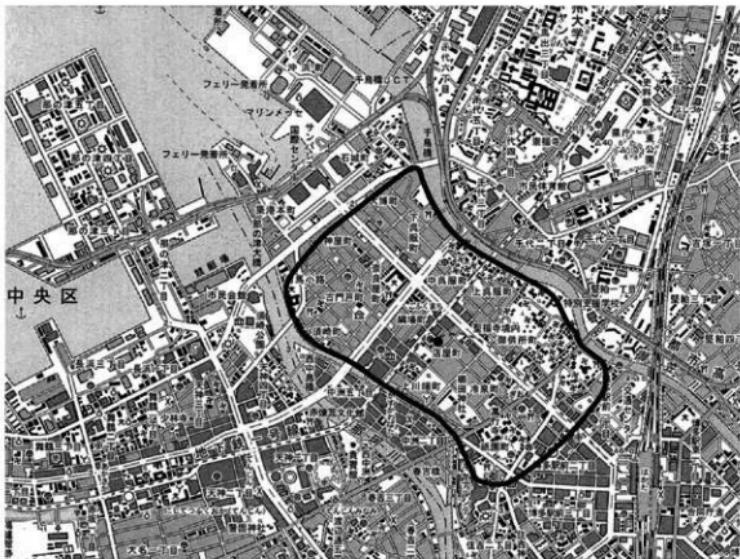
近隣の調査事例を参照すると、明治通りを挟んで今回の調査地点とほぼ対称の位置に当たる 29 次調査では、船材を利用した大規模な埋め立て遺構が検出されている。南東の 61 次調査では、検出されている。南西の 124 次調査では、検出されている。南の 211 次調査では、16 世紀代の石組および瓦組の井戸のほか、調査区の東縁で北西から南東に走る道路跡とみられる整地面が検出されている。

- 29 次 常松幹雄編『博多 VII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 148 集 1987
61 次 菅波正人編『博多 24』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 252 集 1991
124 次 田上勇一郎編『博多 87』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 758 集 2004
211 次 田上勇一郎編『博多 167』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1396 集 2020

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の中央から南西に位置する。現地表の標高 3.6~4.1m で南側が高く、調査地点の東側に隣接する道路は南東から北西に緩やかに下っている。元々の地形を反映しているのであろう。



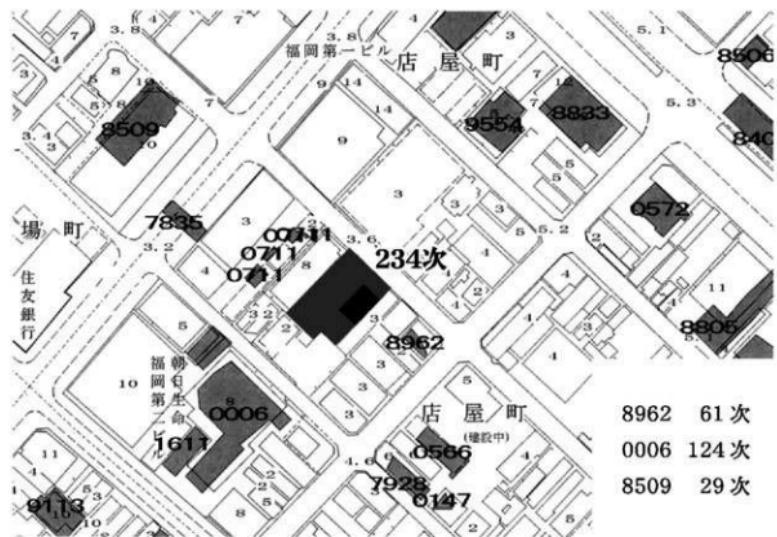


図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)

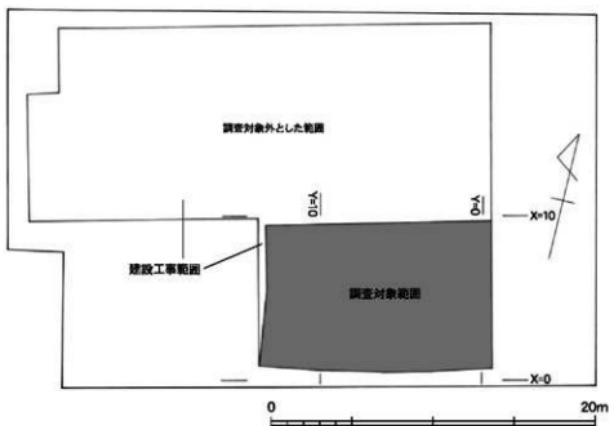


図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)

調査は確認調査の成果に基づき、現地表面下 150 cmまで重機による表土鏟取りを行った後、開始した。表土鏟取り直下で焼土を含む土層が見られ、この上面を第1面とした。標高 2.4~2.6mである。遺構検出時に焼土の広がる部分を遺構としてマーキングしたが、その後の面下げと土層観察の結果、整地層であることが判明した。焼土・炭・細砂の薄い堆積が何層も積み重なった状態になっている。この層を掘り込む明確な遺構として、瓦組井戸 S E 0 1 を検出した。

第2面はこの焼土層を除去した面で設定した。標高 2~2.1mである。第3面は標高 1.6~1.7mである。第4面は標高 1.4~1.5mである。以下灰褐色または黄褐色粗砂となり、湧水が始まる。

出土遺物量はコンテナ 13 箱分である。近世の瓦、中国の銅鏡が出土している。遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

第1面

井戸

S E 0 1 (図5、図版1)

径 2.3mの円形で、遺物の出土状況から瓦組の井戸側をもつものとみられる。焼土層を切り込み、粗砂層まで達している。第4面以下で湧水が顕著となったため、完掘しなかった。軒丸瓦が出土している。

出土遺物 (図6~8、図版6)

1は土師器小皿である。灰黄色を呈し、底部は回転糸切りである。2は染付椀である。3は施釉陶

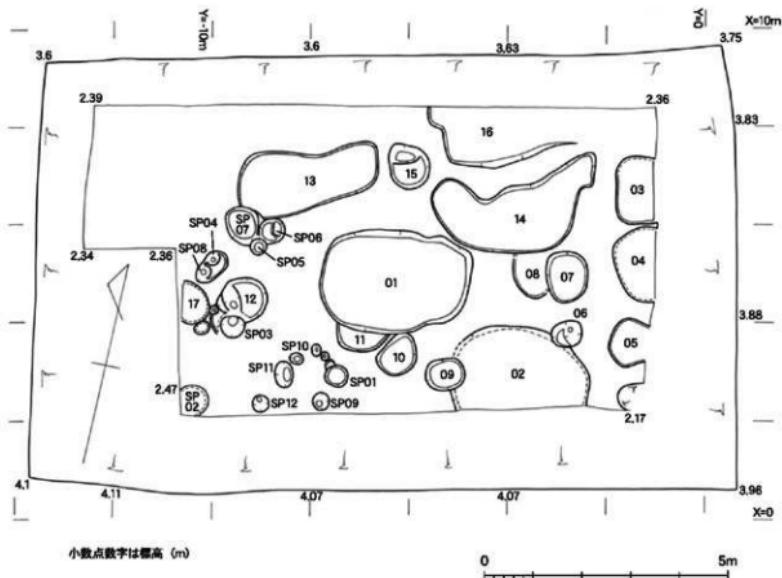


図4 第1面平面図 (S = 1 / 100)

器の壺である。黒色の釉がかかる。4は瓦質土器の火鉢である。暗緑灰色を呈し、外面に菊花文を押捺している。5は輪花皿である。緑灰色の釉が厚くかかる。6は紅皿である。内面と口縁部外面に光沢のある乳白色の釉がかかる。7は土師質土器の火舎である。縦21.6cm、横16.6cm、器高9.2cmで口縁部外面に印花文を施す。赤褐色を呈し、火を受けている。8は軒平瓦である。瓦当部に唐草文を施す。9は丸瓦である。凸面に2ヶ所目釘孔をあける。凹面は模骨痕・工具痕がよく残る。10は軒丸瓦である。瓦当部に福岡藩主黒田家の橘紋を施す。凸面に1ヶ所目釘孔をあける。類品が124次調査のSE482(18世紀廃絶)から出土している。11は滑石製鍋のミニチュアである。縦耳を削り出している。12は土鈴である。縦3.8cm、横2.8cm。13は陶製人形の頭部で、僧侶を象ったものとみられる。高さ2.5cmで、光沢のある浅黄色の釉がかかる。14~16は銅錢である。14は天聖元寶(北宋 1023年)、15は寛永通寶、16は元祐通寶(北宋 1093年)である。17は青銅製鞘尻金具で、3.5×2.5×1.5cmである。

土坑

SK02(図9、図版1)

径2.8mの円形で、深さ5~10cmである。

出土遺物(図10、図版6)

18は白磁楕で、大宰府III-1類である。19は土師器の小型火鉢か。淡橙色を呈し、所々煤が付着する。底部は回転糸切りである。20・21は中国産染付椀である。22は土錐で、橙色を呈し、長さ4.4cm、幅1.6cm。34は銅錢で、銭種は不明。

SK03(図9)

1.35×0.75m以上の方形で、深さ5cmである。

出土遺物(図10、図版6)

35は銅錢で、寛永通寶である。

SK04(図9、図版1)

径1.55mの円形で、深さ5cmである。

出土遺物(図10、図版6)

23は瓦質土器の火鉢で、外面に車輪文を押捺する。

SK07(図9、図版1)

1.05×0.84mの楕円形で、深さ0.25mである。

出土遺物(図10)

24は磨石で、黒色の付着物がある。

SK09(図9、図版1)

0.8×0.64mの楕円形で、深さ0.35mである。

出土遺物(図11、図版6)

37は瓦質土器の火鉢か。暗灰色を呈し、内外面ハケ目を密に施す。被熱している。38は瓦玉である。

39は黒の墓石である。

S K 10 (図 9)

0.92×0.62mの楕円形で、深さ 0.22mである。

出土遺物 (図 10、図版 6)

25 は白磁皿である。26 は土師器杯である。淡橙色を呈し、底部は回転糸切りである。

S K 12 (図 9)

1.03×0.9mの円形で、深さ 0.36mである。

出土遺物 (図 10、図版 6)

36 は銅錢で、元豐通寶 (北宋 1078 年) である。

S K 14 (図 9)

3.4×1.4mの不整形で、深さ 2~14cmである。

出土遺物 (図 10)

27 は土師器杯である。にぶい黄橙色を呈し、底部は回転糸切りである。28 は土師器小皿である。
にぶい橙色を呈し、底部は回転糸切りである。29 は石玉か。

S K 16 (図 9)

2.85×1.3mの不整形で、深さ 4cmである。

出土遺物 (図 10)

30 は龍泉窯系青磁碗の底部である。31 は土師器小皿で、淡橙色を呈し、煤が付着する。

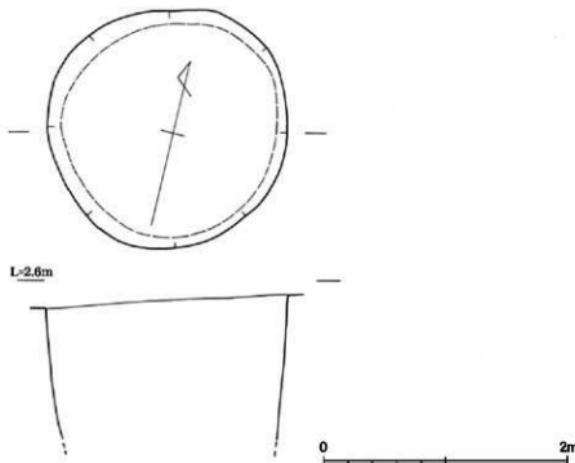


図 5 S E 0 1 実測図 ($S = 1/40$)

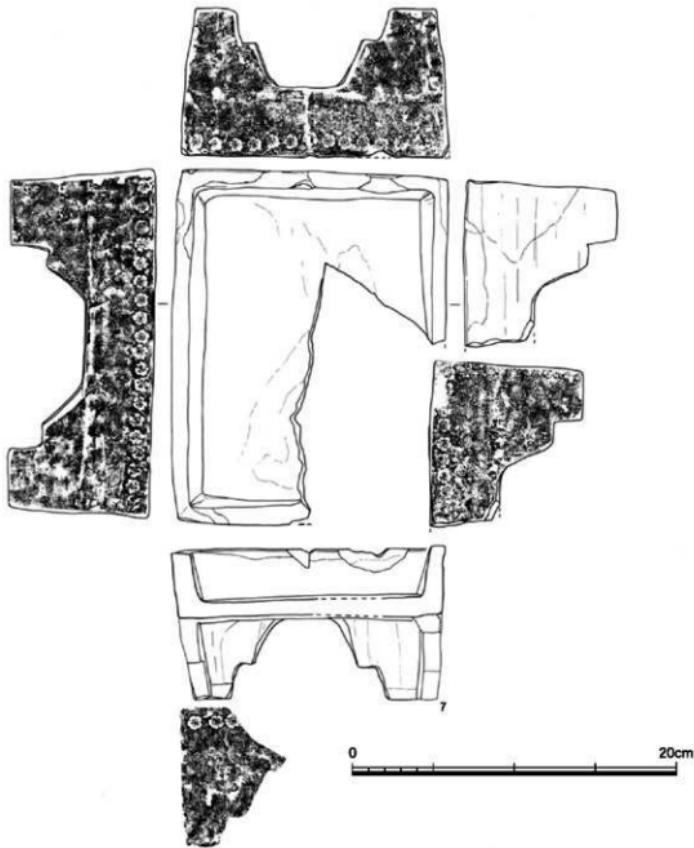
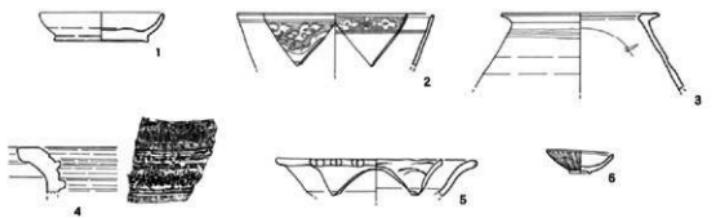


図6 SE01出土遺物実測図1 (S=1/3)

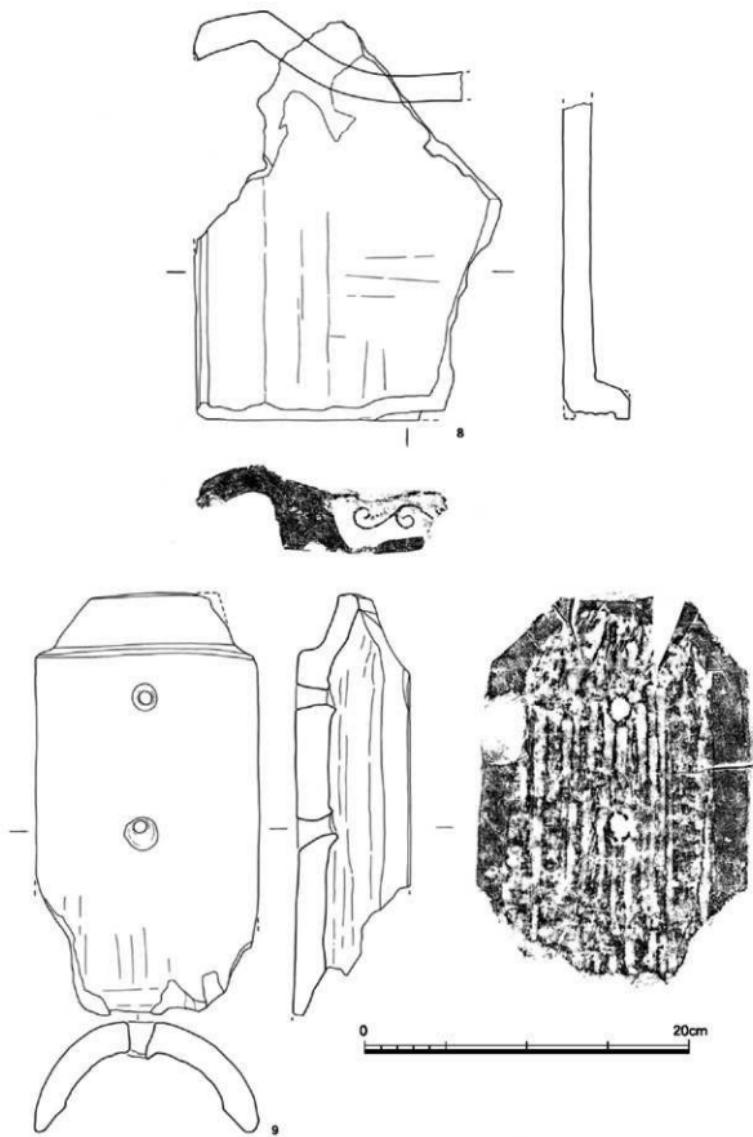


図7 SE 01 出土遺物実測図2 (S = 1/3)

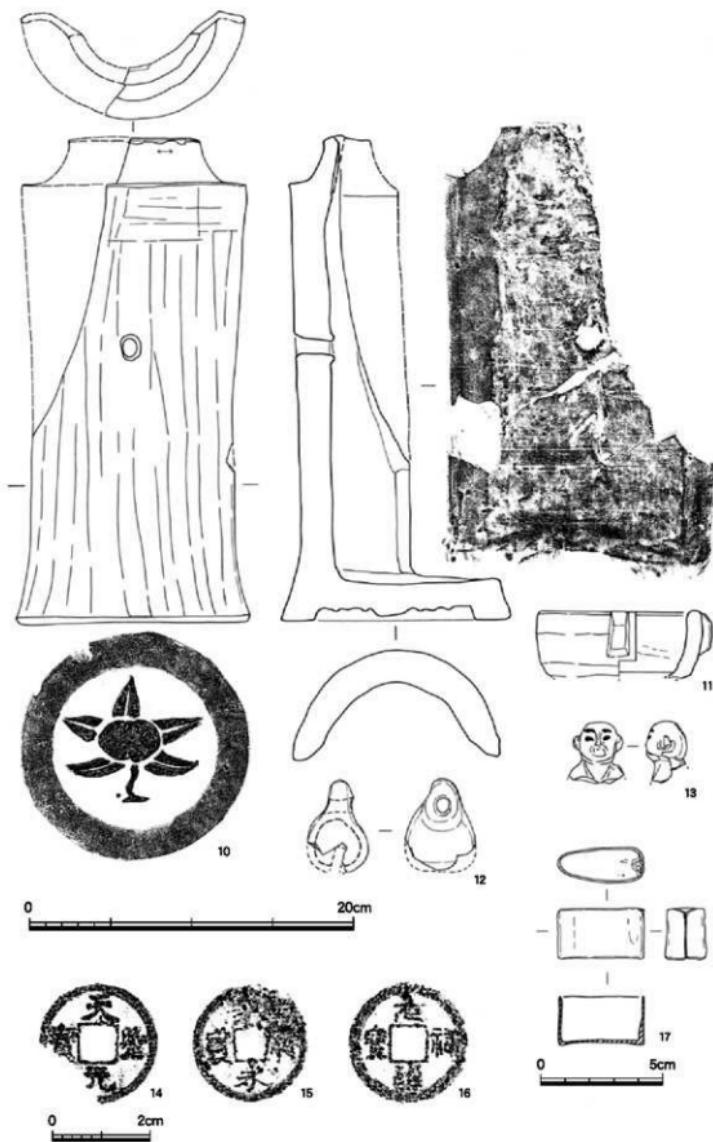


図8 SE 01出土遺物実測図3 (S = 1/3, 1/2, 1/1)

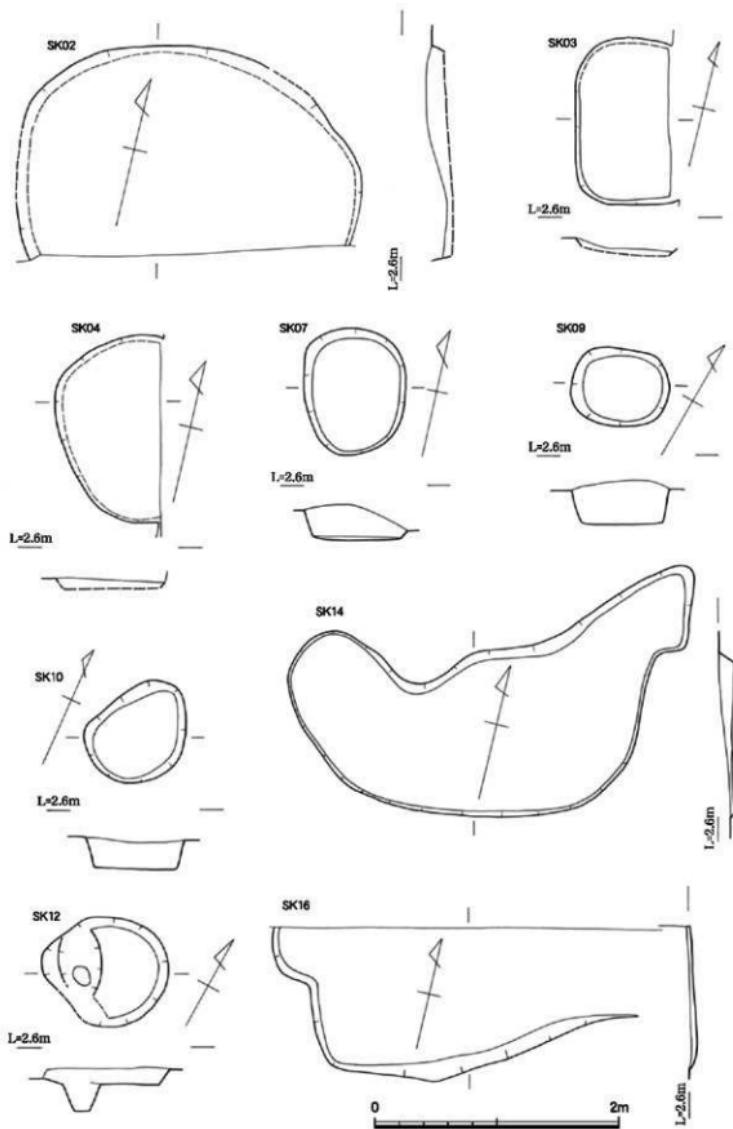


図9 第1面造構実測図 ($S = 1 / 40$)

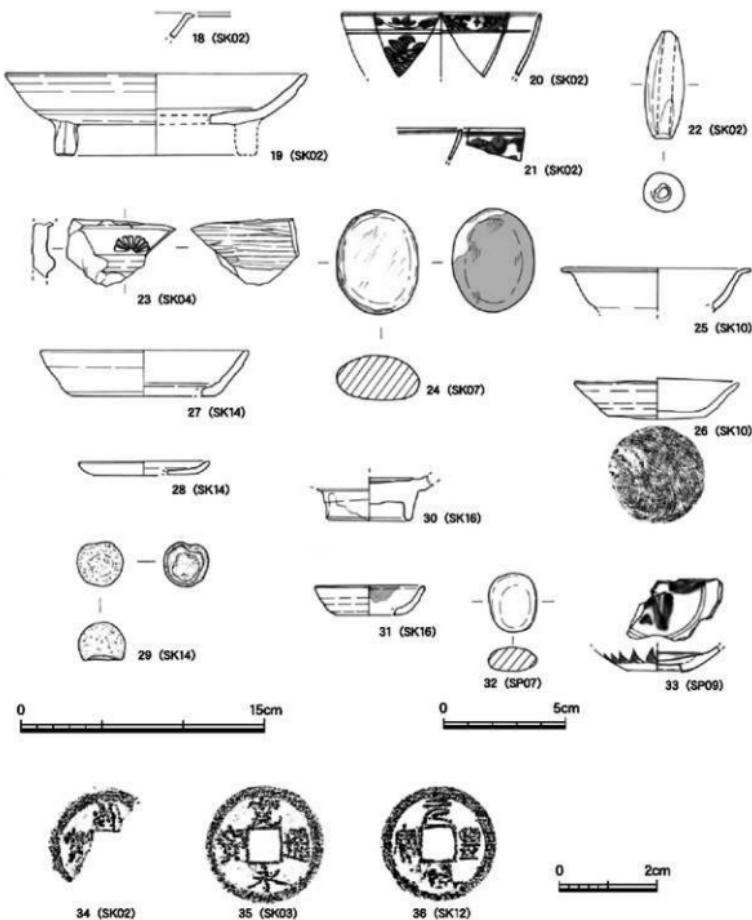


図 10 第1面遺構出土遺物実測図 (S = 1 / 3, 1 / 2, 1 / 1)

S P 出土遺物 (図 10、図版 6)

32 は黒の基石である。S P 0 7 出土。33 は中国明代の染付皿である。S P 0 9 出土。

第2面

土坑

S K 18 (図 13、図版 2)

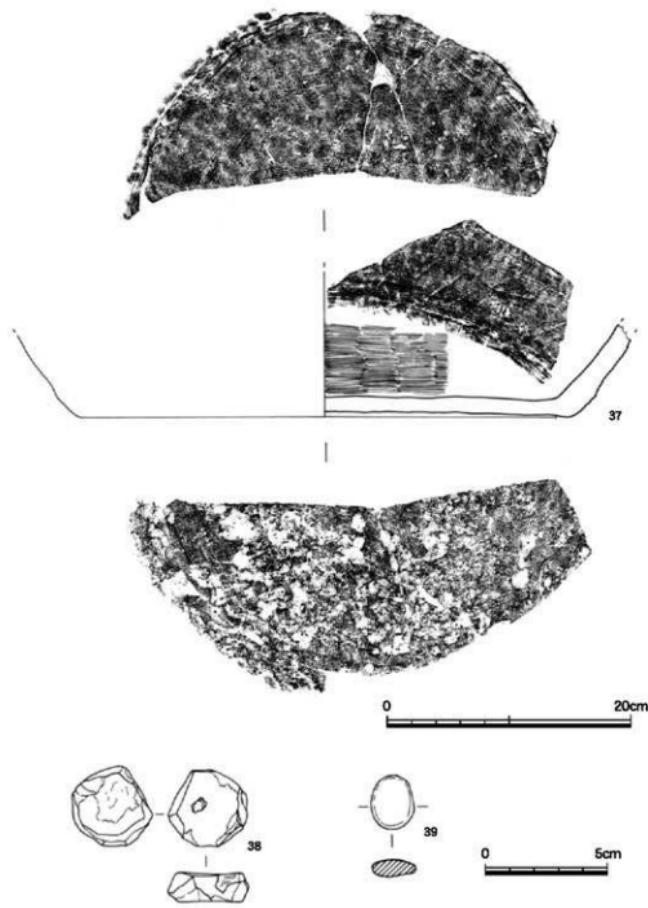


図 11 SK 0 9 出土遺物実測図 (S = 1 / 4, 1 / 2)

径 1.8m の円形で、深さ 0.46m である。

出土遺物 (図 13)

40 は粉青沙器の短頸壺口縁部か。41 は中国明代の染付椀か。42 は白磁小皿である。43 は李氏朝鮮の青磁皿である。44 は青磁碗である。底部内面に花の押型文がある。

S P 出土遺物 (図 13, 図版 6)

45 は土師器小皿である。S P 14 出土。

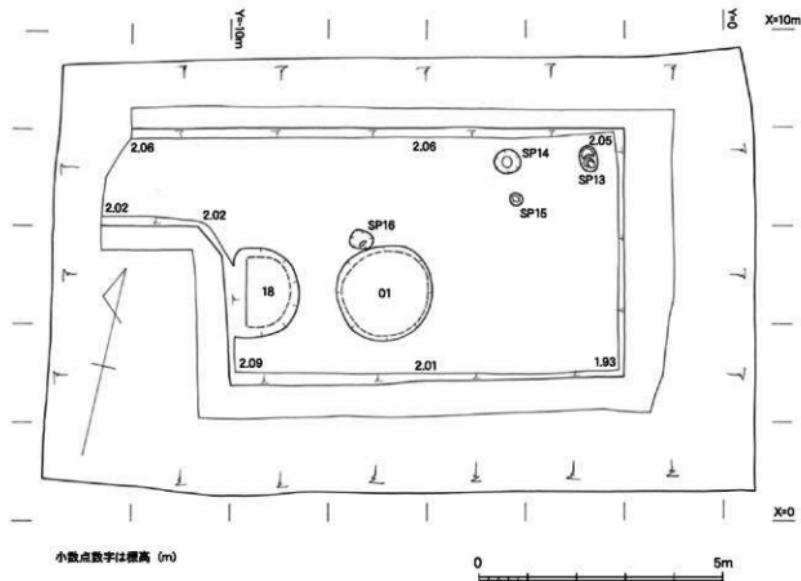


図 12 第2面平面図 ($S = 1 / 100$)

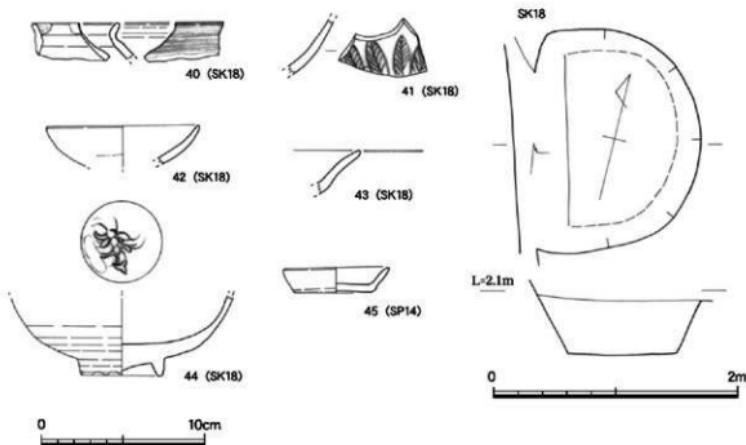


図 13 SK18, SP出土遺物実測図 ($S = 1 / 40, 1 / 3$)

第3面

土坑

S K 20 (図 15、図版 3)

1.65×1.35mの楕円形で、深さ 5 cmである。

出土遺物 (図 15、図版 6)

46～48は土師器小皿である。復元口径 7.5～8.2 cm、器高 1.6～1.8 cmで、にぶい黄橙色を呈し、底部は回転糸切りである。49は黒の墓石である。

S P 出土遺物 (図 16、図版 6)

50～52は土師器杯である。橙色を呈し、底部は回転糸切りである。S P 20 出土。53は土師器杯である。にぶい黄橙色を呈し、底部は回転糸切りである。S P 25 出土。54は土師器杯である。淡黄色を呈し、底部は回転糸切りである。55は瓦質土器の擂鉢である。灰白色を呈し、内面に粗い斜めハケ目、外面になでと指押さえを施す。54・55は S P 26 出土。

第4面

S P 出土遺物 (図 17)

56は土師器杯である。明橙色を呈し、底部は回転糸切りで板状圧痕がある。S P 33 出土。57・58は土師器である。57は小皿で淡橙色、58は杯でにぶい黄橙色を呈し、底部は回転糸切りである。57・58は S P 37 出土。

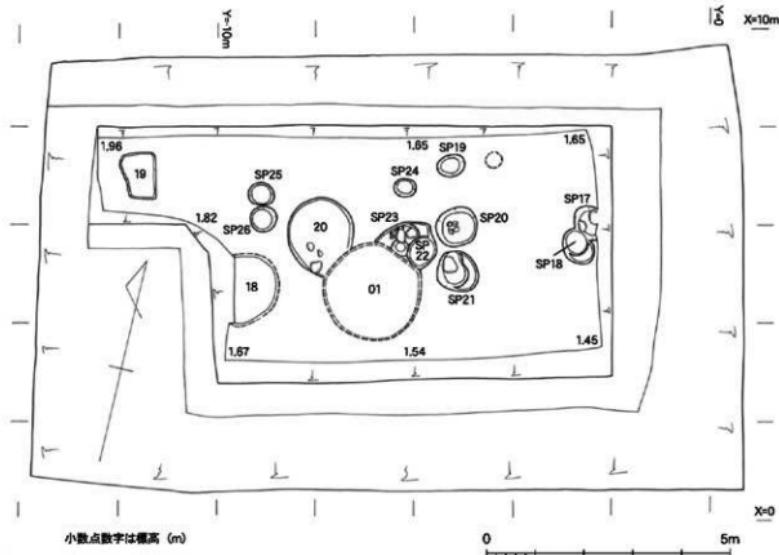


図 14 第3面平面図 (S = 1 / 100)

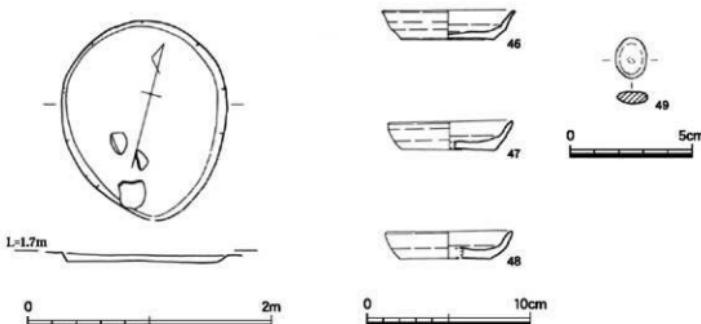


図15 SK20および出土遺物実測図 (S = 1 / 40, 1 / 3, 1 / 2)

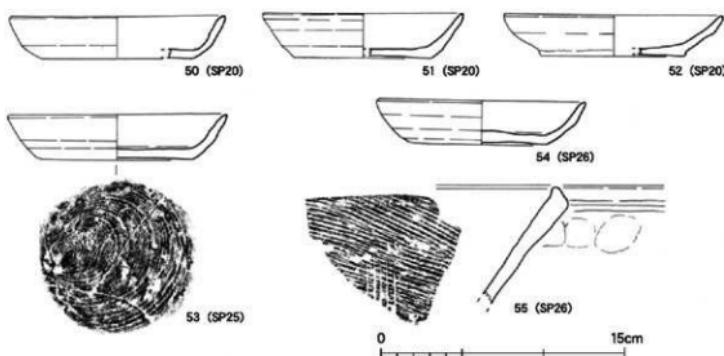


図16 第3面 S P出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

包含層出土遺物 (図18・19、図版7)

59～61は土師器である。59・60は小皿、61は杯で、橙色を呈し、底部は回転糸切りである。62は中国明代の染付皿である。63は施釉陶器楕で、浅黄～オリーブ黄色の釉が疊付以外にかかる。64は瓦質土器火鉢の加工品である。黒灰色を呈し、丁寧な研磨を施している。外面に四目結の押型文がある。65は染付皿である。66は施釉陶器皿である。67は陶器擂鉢である。68は石臼である。69は棒状銅製品である。残存長11.9cm、幅1.7cm。70は青銅製扇形分銅である。長さ1.0cm、重さ1.5g。71は政和通寶(北宋 1111年)である。72は寛永通寶である。以上第1～2面焼土層出土。

73は元豐通寶(北宋 1078年)である。74は青銅製小皿である。口縁部の2ヶ所に径1mmの孔が開く。重さ5.0g。75は青銅製容器の口縁部か。以上第1面精査時出土。

76は滑石製の硯か。77は元符通寶(北宋 1098年)である。以上第3～4面面下げ時出土。

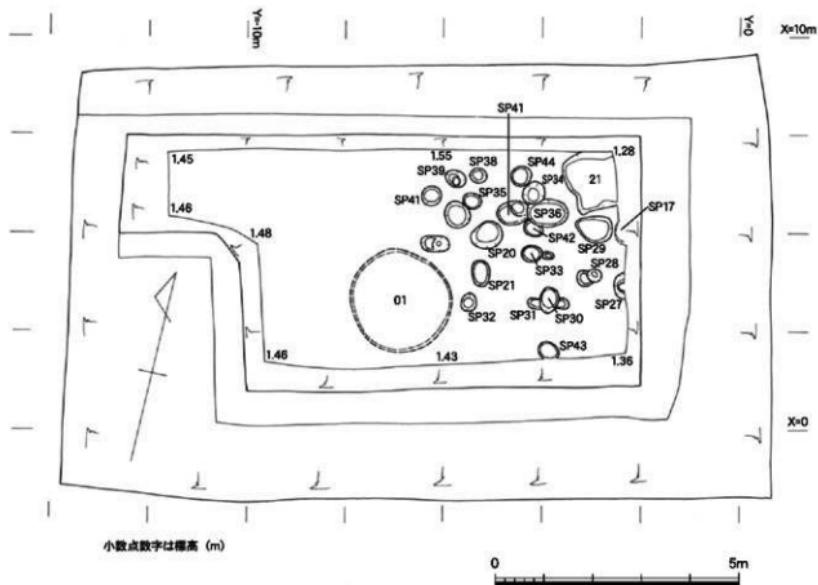


図 17 第4面平面図およびSP出土遺物実測図 ($S = 1/100, 1/3$)

3まとめ

最後に今回の調査成果についてまとめておきたい。

まず 234 次と近隣の 61 次・211 次の調査面との対照を行う。61 次調査では計 4 面の調査が行われている。現地表面から -1.9m までが近現代の客土で、これの除去後に厚さ 30 cm の焼土層が堆積し、この焼土層の直下が第 1 面に設定されており、標高約 2.3m である。

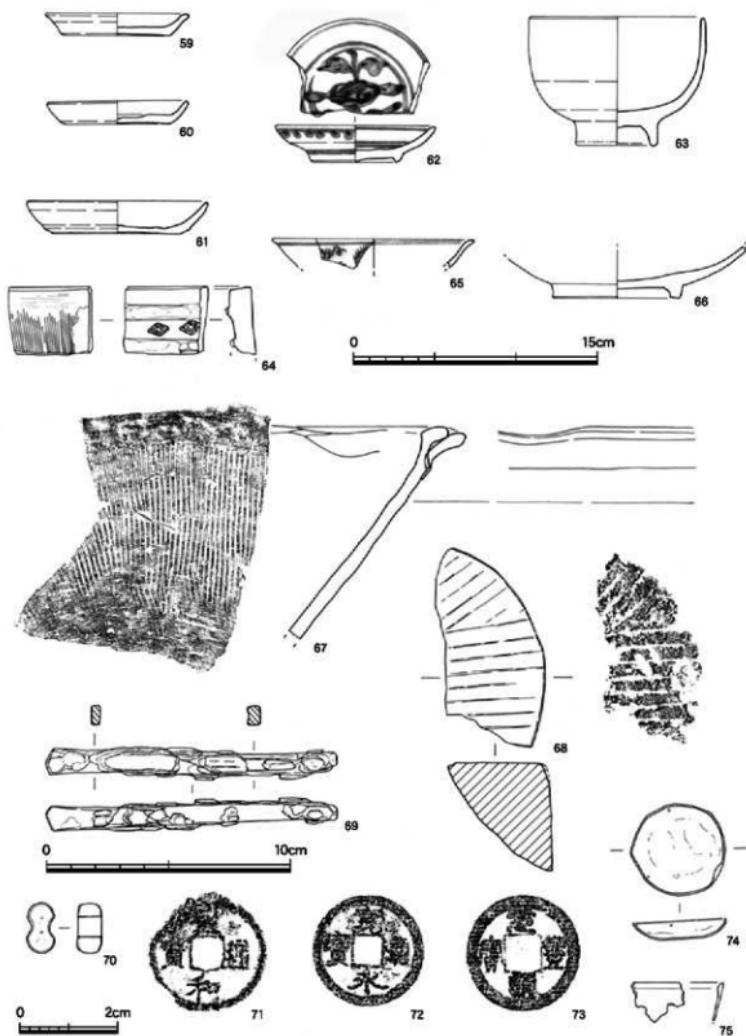


図 18 包含層出土遺物実測図 1 ($S = 1/3, 1/2, 1/1$)

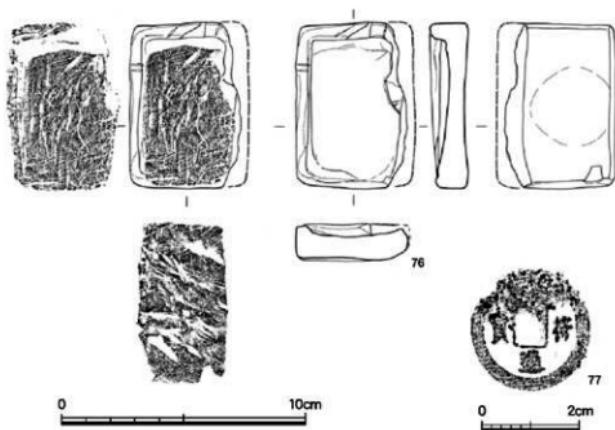


図19 包含層出土遺物実測図2 (S=1/2, 1/1)

一方、234次は現地表面の標高が3.6~4.1m, -1.6mまでが近現代の客土で、その直下を第1面とし標高2.4~2.6mである。その下に焼土層が堆積し、その除去後を第2面とし標高2.0~2.1mである。このことから61次調査の第1面と234次の第2面とが対応する。そして211次調査で検出された道路とみられる南北方向の整地面は標高2.2mであり、それらに対応するものとみられる。

234次および61次調査で検出された近現代客土直下の焼土層は、今回の調査からその上面より江戸時代に属す瓦組井戸が掘り込まれていること、211次調査で検出された石組および瓦組井戸の年代が16世紀後半であることから、16世紀後半の島津氏による焼打ちに伴うものと位置づけられる。今回の調査では焼土層を除去した第2面では遺構がほとんどなくなっていた。

61次では、第1面から-30~40cmで第2面となり標高約1.9mで15世紀、第2面から-20~-30cmで第3面となり標高1.4~1.7mで13世紀中頃~14世紀後半、第3面から-50~80cmで第4面、標高1m前後となっている。立地的に砂丘の落ち際にあたり、特に第3面では建物の基礎とみられる列石遺構や铸造遺構、遺物も陶磁器類のほかに将棋の駒・下駄・草履・花押墨書き木簡・漆器椀など有機質製品が多く出土している。

234次では第3面以下がそれらの面に対応するはずであるが、立地的にさらに谷地形の中に入っている、湧水が徐々に起こり始め、遺構・遺物も顕著ではなく、生活面として利用できる環境ではなかったものとみられる。

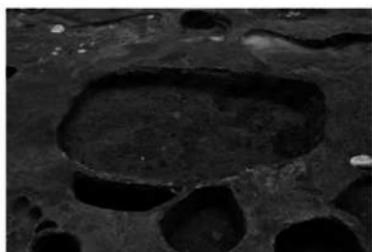
このように立地条件から遺構・遺物が乏しい中で、注目されるのは福岡藩主黒田家の橋紋とみられる軒丸瓦が焼土層を切り込んだ井戸から出土したことである。16世紀後半に島津氏による焼き打ちを受け、その焼土を整地した後の江戸時代に入ってから、福岡藩に関わる屋敷・施設が今回の調査地一帯に造営された可能性がうかがえる。

今回の調査で中世から近世にかけて、当該地が埋め立てられ、どのように土地利用がなされていくか知る手掛かりが得ることができた。

図版 1



第1面全景（西から）



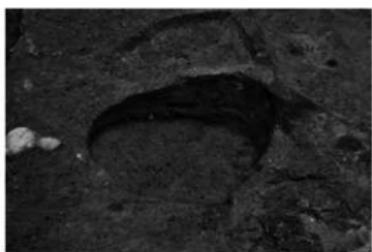
SE 01 (南東から)



SK 02・09 (南東から)



SK 04 (北東から)

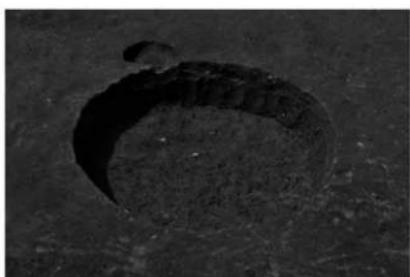


SK 07 (北東から)

図版 2



第2面全景（西から）



S E 0 1 （南東から）



S K 1 8 （南東から）

図版3



第3面全景（西から）



SK20（北西から）

図版 4



第4面全景（西から）



調査区南壁（北西から）

図版5



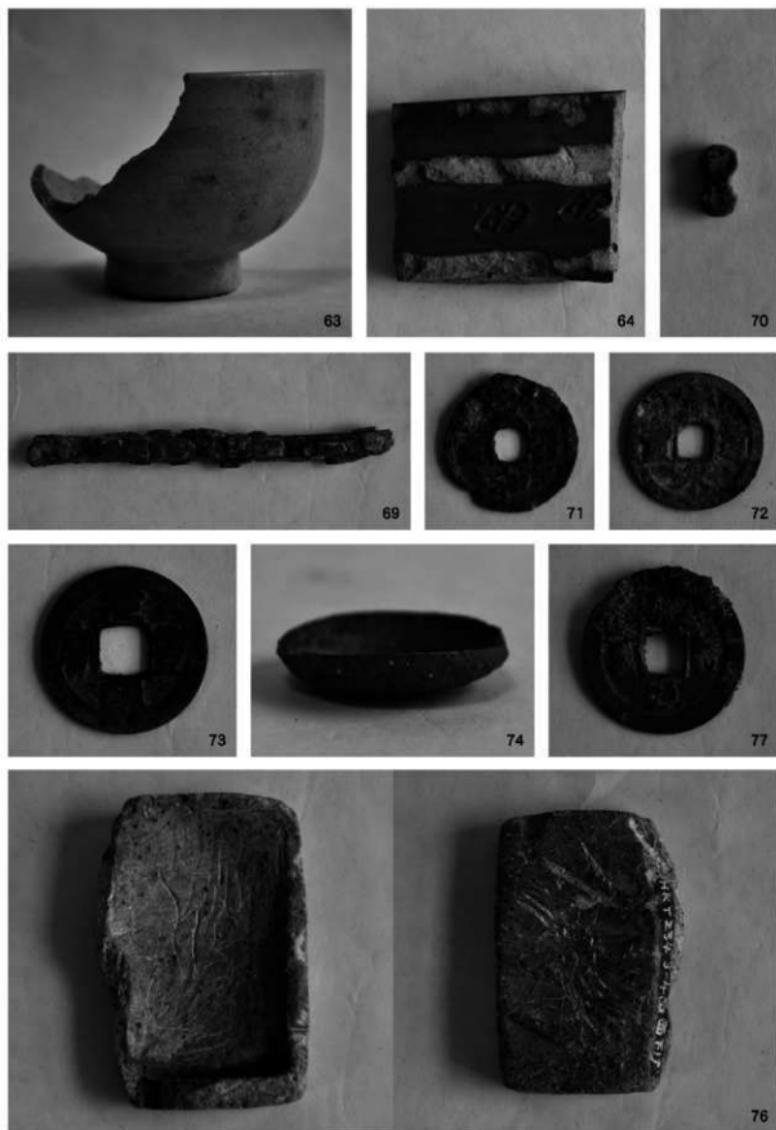
調査区東壁（南西から）

図版 6



出土遺物 1

図版 7



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多 185							
副書名	博多遺跡群第 234 次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 1452 集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1							
発行年月日	2022 年 3 月 24 日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
ふくおかしはかたくんでんやまち 福岡市博多区店屋町 202-1、202-2、 203、204-1	ふくおかしはかたくんでんやまち 福岡市博多区店屋町 202-1、202-2、 203、204-1	市町村 40132	遺跡番号 0121	33 度 35 分 46 秒	130 度 24 分 32 秒	20190819 ~ 20191011	130.5	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
博多遺跡群	集落跡	中世～近世	井戸、土坑、 ピット	瓦、陶磁器、 土師器、銅錢				
要約	博多遺跡群は、博多湾に面した 3 列の東西方向の砂丘上に立地する。今回の調査地点は、遺跡の中央部南西に位置し、海寄りの砂丘である沖浜と内陸の砂丘である博多浜に挟まれた谷地形の中にあたる。周辺の調査では中世後期の陶磁器一括埋納遺構や埋め立て遺構が検出されており、中世から近世にかけて一帯が埋め立てられて土地利用がなされる様子が明らかになっている。今回の調査では、計 4 面の調査を実施し、近世の井戸、中世の土坑、ピットを検出した。それ以下は、湧水が起くる砂層となっており、湿地であることを示している。							

博多 185

—博多遺跡群第 234 次調査報告書—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1452 号
令和 4 (2022) 年 3 月 24 日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1

印刷 株式会社ホンド印刷
〒812-0064 福岡市東区松田 3-10-32